

# Pw:ゼロから始める精神 魔道士

たこぶる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

MTG（マジック・ザ・ギャザリング）×Re：ゼロから始める異世界生活のクロスオーバーです。

MTGの背景ストーリーの主人公の一人である、精神魔道士のジェイス・ベレレンがリゼロ世界入りするというお話です。

※MTGはカードゲームですが、このお話しにカードゲーム要素はないです

※PwはPlaneswalker（プレインズウォーカー）の略です

# 目次

プロローグ 『空白から』	1
第一章1 『エミリアの護衛』	19



# プロローグ 『空白から』

多元宇宙は愚か者を長く生かしてはおかぬ。有用な教訓となろう、生き延びられるのであれば

心の中で誰かの声を聞いた。

重い地鳴りの様に響く声が彼の精神を波立て、掻き立てる。

俺は誰だ

……わか分らない

今有るのはここでは無いどこかの知識だけを残した空っぽな自分。

俺は何故ここにいる

……わか解らない

どこか、とてつもなく遠い場所から来たという記憶とも言いがたい感覚が有るのみで何も答えは出ない。

俺は何をしてきた

……わか判らない

今までなにをしてきたのかも、これからなにをするべきなのかも知らない、暗闇の中を歩いている様な漠然とした恐怖を感じる。

俺の名は

……。

ジェイス・ベレレン

久遠の闇の中で空っぽの自分の内から独白を重ねて拾い上げた知識以外の確かな記憶。

それが俺の名だ。

「あなたは誰？」

鈴の音の様な澄んだ声が優しく鼓膜を揺らし、頭背に当たった柔らかい感触にジエイスの意識は覚醒した。

彼の瞳に眩い日の光が溢れるばかり射し込み、開いた目蓋を細める。

「……」

「ルグニカ王国辺境伯ロズワール・L・メイザース邸の庭よ。あなた、そこに倒れてたの。」

ジェイスは自身の現状をつらつらと口述された未知の単語で端的に述べてくれた声の方へと眼を向ける。

声の主は自身の目と鼻の先、思った以上に近い位置にいた白く美しい少女だった。

少女の淡く輝る紫紺色の眼に上から覗きこまれる形で見つめられている事に気付いたジェイスは自身の頭に当たる柔らかい感触の物を理解する。

膝枕

青少年が一度は夢見るシチュエーションにあつて、ジェイスの心中はそれどころではなく。彼にとつては現状を把握することで精一杯だった。

（人間…いや、未知のエルフ？ ハーフエルフ…なのかな？）

「…きみは？…エルフ…なのかな？」



「…ハーフエルフよ。私は…サテラ。ハーフエルフのサテラ」

伏せ眼がちにサテラと名乗った彼女を観察し、ジェイスは自身の持ちうる知識から目の前の少女が何者であるかを引き出す。サテラからは自分への不審感と何か違和感を感じる。

「ねえ、あなたは誰？」

曇り一つの無い澄んだ眼で見つめるサテラは、ジェイスへと先ほどより強い口調で同じ問いを投げ掛けた。その眼からは強い疑心と少々の関心を感じる。

ジェイスは一瞬、目の前の見知らぬ相手からの問いに正直に答えるべきかと逡巡するが、真っ直ぐに彼の方を見つめる眼に気圧され彼は口を開いた。

「…俺はジェイス。ジェイス・ベレレンだ」

「…ジェイスね。ねえ、ジェイス。あなたはいったい何者？どうしてここに倒れていた

の？」

「……俺は……」

問われ、思考し、その答えを自分の脳内から記憶を引き出そうと試みるも

(…俺は…何者なんだ？なぜここにいた？…何も思い出せない…)

引き出そうとしても答えは見つからず、

サテラからの問い掛けにここ以前の記憶が存在しないことに彼自身が気が付いた。

唯一思い出せたことは自身の名前のみだが、これすらも正しいのか判断すらつかないのが彼の現状だった。

「…解らない」

「え？」

「…解らないんだ…。俺がいつたい何者で、なぜここにいるのか…、名前以外何も覚えていないんだ」

「それはそれは、とつても困ったねえ」

サテラの方から彼女のものではない中性的な高い声が飛ぶ。

突然の第三者の声にジエイスは顔を上げ、声の方へ眼を向ける。

見ると、直立した猫の様な生き物がサテラの肩に頭を乗せて凭もたれかかる形で顔を覗かせた。

「きみは？」

「やあやあ、僕の名前はパック！見知らぬ不法侵入者兼不審者のジエイスクン？ちよつと君がすやすやおねんねしている間に身体をじーっくり、みさせてもらったよ？」

「…パツク、やらしい」

「そりやあもう！血気盛んなオスだもの！

…けど、いくら僕でも同性で違う種族の相手はご遠慮願いたいかな」

「きみは…いつたい、どういう生き物なんだ？」

「精霊だよ。ご存知無い？」

鼻横のヒゲをピンピンと上下させながら言葉を話す猫らしきものをジエイスは凝視して、自身の知識の内からどうという生物かを検索するが、それが自分の知らない未知のものであると理解する。

「おや？異種返しのつもりかな？そんな男前にじいーと見つめられると照れちゃうな。可愛い我が娘の膝枕を堪能しながら、こんなかわいい僕を間近で見れるなんて君はとっても幸運だねえ」

「特別なんだからね！すぐく魔まされていたし、そんな状態で地面に寝かせて置くのも忍しのびなかったから！起きれる様だったら早く起きて！」

サテラは恥じらいからかその透き通る様な白い肌を少し紅潮させてむくれる。

「そう…か、君たちには色々と手を焼かせてしまったみたいだね。ありがとう」

ジェイスは少し紅くなっているサテラの膝から身を起こすと全身から感じる鈍い痛みとひどい倦怠感に耐えながら、彼女らの方に向き直り、頭を下げた。

「ねえ、パック。この人…」

自身の頬をスリスリと触りながらはにかむパックと名乗った猫の方を向いたサテラはやや不安そうな顔で囁ささやいた。その様子から不安と困惑を感じる。

「とりあえず悪い人では無さそう…よね？」

言われたパックが眼を細めて品定めするようにジェイスを上から下まで凝視する。

「うーん、そうだね！きみの身体について色々気になるところはあるんだけど…それは置いていて、とりあえず邪気は感じないかな。でも名前以外何にも覚えてないなんて所謂、記憶喪失者ってことなんじゃないかな？」

「…記憶喪失…」

パックが話した言葉をジェイスは呟く様に復唱する。

ジェイス自身、自分の状況からなんとなく思い当たってはいたが他人から言われることで始めて自分自身の現状を省みる事ができた。

自分は記憶喪失。

この実状を把握したジェイスは後先の全く見えない自分の状態に漠然とした恐怖と不安を感じ自然と身体が芯から震えが起き、吹き出た冷や汗がじんわりと肌を濡らす不

快感が全身を包んだ。

「…ちよつと、大丈夫？ひどい顔になっているわ」

「無理はしない方がいいと思うなあ、またこの子の膝枕を堪能したいってことなら話は別だけど…」

「また倒れたって絶対にしてあげないんだからねっ」

「じゃあ、今度は僕が腹枕してあげようか？自慢だけど僕の毛並みの良さは精霊の中でも随一だと自負しているよ」

言つてパツクは腹を軽く叩いてポムポムと小気味の良い音を出す。

ジェイスはそんなパツクの冗談めいた軽口とサテラのキツイ言葉の裏の献身と心配を感じ、少しだけ冷静さを取り戻すことが出来た。

「気遣ってくれて本当にありがとう、君たちみたいな優しい人達には会ったことが無いと思う。…覚えてないけど、きつと過去にも」

「勘違いしないで、これはただの同情。私があなたを見つけて使用人を呼びつけるのも悪いから、勝手に私が世話を焼いただけだから。」

それに倒れている人を見つけちゃった助けるのは義務みたいなものだし、そのまま死なれても寝覚めが悪いだけだから」

早口で宣い、<sup>のたま</sup>、ファイと横向くサテラを尻目にやれやれとばかりにパツクがため息を吐いた。

「ゴメンね。素直じゃないんだよ、うちの娘。ハーフエルフだからって毛嫌いする輩が多いせいで」

「この国ではエルフを差別しているのか？」

「エルフっていうより、ハーフエルフを…かな。まあ、色々と込み入った事情があるんだ



よね」

パツクの口ごもる様子からジェイスはこちらから聞くべき話題では無いと察するが、恩人達が軽んじられていることを知り自分の内から静かな怒りが湧くのを感じる。

「その人の人間性を見ずに種族だけにこだわるなんて、すごく……くだらないな」

「知った風なこと言わないで。そんな簡単な話じゃないの」

ジェイスが怒りのあまり口走ったことに対して、サテラはどこかもの悲しげな顔で反論した。

「……ごめん、そんなつもりじゃなかったんだ。ただ俺にとって君たちは見知らぬ自分を助けてくれた素晴らしい恩人だから」

「気休めだろうけど、……そうね、そう言ってくれるだけでも助けてあげて良かったって言えるわ」

サテラから刺々しい感じとげとげが少し消えると、はにかむ様に少し笑った。

「私…、本当の名前はエミリアっていうの。嘘をついてごめんなさい。でも、あなたがどういう人か分からなかったから」

「本つ当だよね！サテラなんて悪趣味な名前使って！使うならもつとマシなものにしないで！悪い娘め！」

「…ごめんなさい。とっさだったから他に思い付かなくて…」

しゅんとした様子でエミリアはパツクに謝罪した。

サテラという名前が彼女らにとって良くない意味合いのものだとジェイスは察して、質問したいという好奇心を抑えた。

「それで？きみはどうするの？ジェイス。なにか今後の先行きは見えてる？」

「自分自身の素性も解らないから、正直先行きもなにもないよ。：助けられてばかりで申し訳ないが、出来れば何か助言を貰いたい」

「まずはロズワールと会ってみるのどうかしら？ここはロズワールの領内だし、今のあなたって事情はどうあれ、不法侵入者という扱いだから…」

ロズワールと聞いてジェイスは先ほど、自分の起きがけにエミリアから先述された名前だと思い出す。

おそらくは自分が倒れていた庭一帯と少しの距離に見える壮観な邸宅の持ち主であろうと彼は推察する。

「ロズワール…という方がこの主人というと、きみはその方の親族に当たる人ということなのかな？」

「いいえ、彼な私の後見人で同居させてもらってはいるけれど、親族では無いわ」

「…なるほど、何か色々複雑な事情が有るみたいだね」

ジェイスは難しい事情の話しを今するべきでは無いと判断し、とりあえず自身の今後の処遇に戻るため一旦話題を切る。

「それでその彼は今、あちらの邸宅にいらっしやるのかな？」

ジェイスが自身が今いる場所から数十メートル離れた場所に有る、荘厳な邸宅に視線を移す。

「今は不在だから屋敷には居ないわ、でもすぐまた帰ってくると思うし、それまで部屋を使える様に私が一緒にレムとラム…使用人達に話してあげるから」

「先に見つけたのが僕達じゃなかったら侵入者として管理局に通報されて今頃は牢屋の中でくさい飯を食べるはめになっていたんだよ？優しい優しいウチの娘に感謝してね」

「…そんなんじゃない、ラム達の仕事を増やしちゃうのも悪いから自分でやっただけだ」

し、牢屋の中でぎったんぎったんにされるあなたを想像しちやつて憐れに思っただけなんだから」

「…本つ当にありがとう。いやほんとに」

ジェイスは何も解らない今の自分が彼女らの言う責め苦を味わえば、どうなっていたか想像してしまい、改めて、彼女らに心からの感謝を述べた。

「とは言っても僕も正直きみの身体について、ベアトリスとロズワールも加えて話したいから、そのまま追い出したく無いんだよね。…別にイヤらしい意味じゃにやいよ?」

「俺の身体…?」

疑問を呈するジェイスをパツクは猫目を細めてじつと凝視する。

「きみの身体は普通じゃない。身体の奥底にとてつもないものがある。それがなんなのかは僕にも解らない」

ジェイスを凝視するパツクの眼に未知のものへ対する好奇の色が光る。  
声も先ほどまでのにこやかなものから一変して冷たい調子へと変わっていた。

「…本当にきみはいつたい何者なんだろうね？ジェイス・ベレレン」

パツクの値踏みするような質問がジェイスの空<sup>セ</sup>つ<sup>ロ</sup>ぽの精神を小さく波立てた。

## 第一章1 『エミリアの護衛』

「初めましてえ、君がジェイス・ベレレンくんだねえ？ 私はロズワール・L・メイザース。エミリア様と大精霊様から話は聞いているよお？ 何でも記憶喪失で庭園に倒れていたとかあ」

「…疑わしいでしょうが、その認識で間違い有りません。メイザース殿、昨日は身綺麗にさせていただいた上に、食事と部屋を与えていただいたことに感謝致します」

「あはあ、ご丁寧にどうもお、是非ともお私のことは親しみを込めてロズワールと呼んでいただきたいねえ、敬称も無しだよお？」

エミリアとジェイスが出会った丸1日後、ロズワール邸宅にて衣食住の世話になり身綺麗になったジェイスが与えられた自室にて、

先ほど帰宅したばかりの邸宅の主人とその傍らに立つ桃色髪の従者と共に対面していた。

濃紺色の長髪に黄と青色のオッドアイ、整った顔立ちに道化じみた化粧をした180センチを超える長身の痩せぎすの貴族然とした青年という奇抜な見た目に、ノック無しに入室された時にはやや面食らったジェイスだったが、

その緩慢な喋り方に隠された、知性とカリスマ性を彼から感じ取り、少々恐縮していた。

…彼が無造作にジェイスの身体に抱き付くまでは。

「おやあ？君、着痩せするタイプなのかなあ、見かけによらずなかなか良い身体をしているねえ」

「メイザー…、ロズワール、いきなりなにをするんですか？ほんと、なにを…、あ！尻を触らないでいただきたい、おい！ほんとにやめろ」

ジェイスは自身の尻に伸びたロズワールの手を掴み、もう片方の手で軽くロズワールの身体を押し、距離を取らせた。



押されてバランスを崩しかけたロズワールを桃色髪の従者が支える。

「ああ、なかなか鋭いねえ！ 見えない位置の私の手に気付き、よおく防いだよお、何かの加護が有るのかなあ？」

ロズワールはさも嬉しそうに笑うと、白手に包まれた両手で拍手をした。

「相手の感情を察知するのは得意なもので…、それでこれにはどういう意図があったんだ？ 初対面の相手に対しては過度過ぎるスキンシップだと思うんだが」

「なあーに、君の身体のマナとオド、そしてゲートの様子を計らせてもらったんだよお、大精霊様から聞いてはいたが、君の身体はかあなあり特殊だねえ」

マナ、オド、ゲート、ジェイスは昨日、邸宅に招待を受け、身綺麗にさせてもらってから、パックとエミリアから同じ単語の説明を受けたことを思い出した。

「君もエミリア様と大精霊様から昨夜にも聞いてはいるんだろおけれども、おさらい

をおしておこうか。マナとオドとゲートについてえ、君の認識を聞かせてくれるかなあ？」

問うたロズワールの雰囲気が変わったことを、ジエイスは察知し、恐らくこの質問で自分を値踏みするのだろうと彼は察した。

「…マナとは大気に存在する魔力で有り、ゲートを通じてオドに蓄えられる。また、ゲートを使い、放出することによって6種の属性、火、水、土、風、そして陰と陽の魔法を使用することが出来る。…マナはオドで代用も出来るが、失われたオドは戻らず、尽きれば廃人となる…と簡略したがこんなところだろうか？」

「いいねえ、その知識は元々知っていたのかなあ？」

「いいや、エミリアとパツクに教えてもらうまでは知らなかったな」

「ふうむ…それはとおってもおかしな話だねえ」

ロズワールはジェイスの対面から移動し、ベッドに腰掛けているジェイスの隣りに座り、その眼をじつと覗きこんだ。真つ直ぐに見つめる青と黄色のオッドアイからジェイスが感じるのは強い関心と疑念だった。

「…もう変なことはするなよ？」

「ああ、さつきはごめん。でも、今は真面目さあ、ジェイス。君は記憶は無いけど知識は頭に残っているんだよねえ？」

「ああ、その通りだ」

「となるとお君はマナ、オド、ゲートという常識は元々知らなかったわけだあ」

話しながらロズワールの関心がより強くなっていくのをジェイスは感じる。

「それはあ生きていく上でえ当たり前の知識だから知らないのはおかしいことなんだあけど…君の持つ特殊なマナに関係あるのかなあ？」

「俺のmana?」

「そう。私の見たところ君の身体を流れているmanaは異質だねえ」

「…manaが異質? どう異質なんだ?」

「まあ、私の知っている六属性と一致しない物だし、正直、私にも未知のmanaだ。それを踏まえて前の常識の話に戻るんだけどお…」

ロズワールはおどけた態度から一変した鋭い眼でジェイスを捉えた。

「…君、もしかして異世界から来てたりする?」

ジェイスはロズワールから急に発せられた威圧感に驚きながらも気丈さを保つたまま相対する。

「…なぜそう思うのか聞かせてもらえるか？」

「もおちいろおん、まず第一に君と直接会って話しをしてわかったけど、君は常人以上に賢い。エミリア様、大精霊様から一度だけ教授された知識を私に説明出来る位だしねえ、けれどさつきも言った通り、その知識は常識だ。この世界だと知らなきゃ生きていけない程にねえ、君ほどの賢者が知識として知っていないのはおかしい」

「…第二に？」

「さつき言った君のmanaだねえ、今まで見たことも聞いたこともない色のついたmanaだ。それもこの世界のmanaじゃないと考えれば説明がつく」

「…まだ有るのか？」

「第三にいい、まあこれが最後だねえ、——ラム」

「はい、ロズワール様。」

ロズワールの傍らに立っていた桃色髪の使用人はその名前を呼ばれると純白のハンカチに包まれた何かをロズワールに手渡した。

「君があここに宿泊している間に衣服を洗濯させてもらったんだけどお、その時、君の所持品を見させてもらってねえ、その中にこんな物が有ったよお」

ロズワールは手に持ったハンカチを開いて中身をジェイスに見せた。

そこにあつた物は金属製の二つの籠手と鞘に納まつた短剣だった。

「これらを見てえ、君自身はどう思うかなあ？」

「…俺がああなたの立場なら真つ先に刺客かと疑うな」

「そうだよねえ、今が悪い時期というのもあつて私もまずはそう考えて君の持ち物と武器から身元を調べようとしたんだあ、そしたらびっくりだよお！これらは見たことも無

い金属で出来ているじゃないかあ、これが第三だねえ」

「要するに、俺の知識にこの世界の常識が無く、身体には未知のManaが流れていて、未知の金属の装備を持っていた…つてことで異世界から来たんじゃないかと言いたいわけだな？」

「そういうことだよ、君自身はどう思うかなあ？」

「確かにあなたの話しは理に叶ってはいるが、俺は何も覚えていないし、証明しようが無い」

「証明は出来ると思うよお、君の知識のままにその未知のManaを使って何か魔法を使ってみてはくれないかなあ、頼むよお」

ロズワールは子供の様な興味に満ちた眼でジェイスを見つめながら請願した。

「念のために聞くけれど、俺に拒否権は無いんだろう？」

「あはあ、君にはあまだ王選候補者たるエミリア様とその後援人である私に放たれた刺客という疑いは晴れていないんだよお？何より、君はあ友人の頼みを断る様な薄弱な奴なのかい？」

言われてジェイスは諦めた様に薄く笑うと、意識を自身の両手へと集中させ、自身の感覚の向かうままに放った。

ジェイスの両手から放たれた、青色の靄もやはロズワールの目と鼻の先で揺蕩たゆたいながら、徐々に形創かたちつくり、その形はジェイスの姿と瓜二つのものに変化した。

ロズワールは自身の前に現れた二人目のジェイスを目の当たりにして眼をきらきらと輝かせ、その傍らに佇んでいた桃色髪の使用人も目を白黒させた。

「あはあ、男前が二人になったねえ。呪文も無しにこんな高度そうな魔法が使えるなんて、すごいよお。この魔法の名前を教えてくださいるかなあ、それと何か他に出来る魔法はあるかい？」

「この魔法は幻影術イリュージョン、幻を生み出す魔法だ。後はマナを水と氷に変化させる魔法と召喚



魔法、…それと精神魔法というものを少々」

「へえ！召喚魔法に精神魔法、とおつても興味深いなあ、それらは見せてくれないのかあ  
い？」

「あいにくと召喚魔法は発動してここに喚ぶとずっと存在することになるから世話をす  
る必要が出てくるんだ。幻なら簡単に消せるんだけどね、こんな風に」

言つてジェイスがパチリと指を一つ鳴らすと、ジェイスの姿の幻は青色の霧もやに戻り、  
そのまま霧散し消えた。

それを見たロズワールは少し残念そうな顔を見せる。

「そして、精神魔法だけど…、…これは正直あまり見せたくたいな」

ジェイスがややや暗い表情で話すと、それが興味を惹いたかロズワールの眼光が怪しく  
光った。

「ほおーう、それは何故かなあ？そして、そもそも精神魔法とはどういう物か聞かせてくれるかなあ？」

「精神魔法は文字通り精神に関する魔法で、簡単なもので相手を眠らせたり、意識を乱したりする。高度なものだと相手の精神を乗っ取って操ったり、記憶を書き換えたり出来る」

ジェイスの言葉を聞いて、ロズワールの顔色が変わる。

「…それはとおてえもお恐ろしい魔法だねえ」

「それが俺が見せたくないと言った理由だ、やむを得ない場合以外はあまり使いたくはない。それに…」

「それにい？」

「これはあくまでも持論だが…精神は俺にとって大きな武器だが、同時に大きな弱点で

もある。高度な精神魔法を使っている際は自分自身の精神も無防備になるから危険なんだ」

「とういことはあ、君にとつての切り札という訳だねえ。でも、その切り札と弱点をホイと私達に話してしまつていいのかなあ？」

ロズワールの疑問にジェイスは肩をすくめて明るい笑みを見せて答えた。

「この国の事情はエミリアとパックから聞いているし、今は少しでも自分のことを明かして信頼を得たいからね。何よりも俺たちはもう友人なんだろう？」

「あはあ、そうだねえ。さつきは君を刺客なんて疑つて悪かつたよお、それで君と友人同士になった所で提案なんだけどお、…君、うちで雇われてみないかあい？ 給金は出すし、衣食住の保証もするよお。他に行く当ては無いんだろお？」

「…ああ、しかし、いいのか？ 俺の様な、どこの誰とも解らない奴を雇い入れて」

「君とお直接話をして信頼出来ると分かったしい、何よりその能力はとおつても有用だ。……ここで逃して他で雇われるのも避けたいしねえ」

「それが本音に聞こえるな、……いいだろう、あなたの申し出を請けよう。しかし、雇われるとは言つても何をすればいいんだ？」

「まずはあ4日後にエミリア様が王選の関係でルグニカの街へ向かわれるからあ、付いていつてえ警護をしてほしい。私は今日の夜にも発たないといけないからねえ」

「今日また発つのか、随分と多忙なんだな」

「まあねえ、これでも辺境伯だからねえ、私」

言つてロズワールはおどけた様に笑つてみせた。

「屋敷のことについてはあその後かなあ。まずこの後の3日間はゆっくり休んでよお、じゃあそろそろ失礼しようかなあ」

言い終えてベッドから立ち、出口の扉を開けた途中「あ、そうだあ」とロズワールがジエイスへ向き直った

「これは私の興味本意で聞くんだけどお、君、エミリア様のために命は捨てられる？正直に教えてよお」

急な問いにジエイスは面食らうも、ロズワールの態度と裏腹な真剣な眼差しに真剣に思考し応える。

「……いや、エミリアは確かに恩人だし、彼女のために命を張って戦うことは出来るが、命を捨てることは俺には出来ない」

「ほーう、それは何故だあい？聞かせてくれるかなあ」

「俺には記憶は無いが、しなければいけないことがある様な気がする。それを蔑ろないがしにして、エミリアを優先することは出来ない」

ジェイスはロズワールの真剣な眼差しに応える様に、真剣な眼で見えて答えた。

ロズワールはジェイスの答えを聞いて満足した様に笑うと手をヒラヒラと振った。

「ありがとうねえ、それじゃあ4日後によろしく頼むよお」

言つてロズワールはジェイスの部屋を従者を引き連れて後にする。

「…彼女のために命を捨てる騎士は現れてくれないものかねえ」

誰にも、傍らの使用人にすら聞こえない声で、ロズワールは呟いた。

「…まさか、初仕事からこんな事になるなんてな」

ジェイスは4日前の出来事を思い出しながら街の街道から暗い路地裏へ駆けていた。

事が起きたのは数分前、エミリアとジェイスがルグニカの街に到着してしばらくの出

来事。

ジェイスが初めてルグニカの街を訪れるということ、街を案内してくれるというエミリアの計らいにより、街の中をしばし散策していた矢先の事、ジェイスの傍らを歩いていたエミリアにスリを働いた橙色髪の少女を追ってジェイスは街中を駆け回った。

「おいっ！止まれ！」

「へっ、ばあーか！追い付いてみるよ、のろまあ」

ジェイスは自分の数メートル前方を走っている橙色のショートヘアをなびなせた少女へと声を上げる。

その声をあざ笑いながら、多少余裕の有る様子で彼女は自分の後方を走るジェイスを挑発している。

「…ッ！クソガキ…！」

ジェイスは少女の挑発に乗るかの様に走る速度を上げて、少女の背中へと迫る。

ジェイスの見たところ少女は街の地理にも慣れており、普段からこういつた行為を<sup>ならわい</sup>生業としている様子とその身軽そうな体型から章駄天のごとき足の速さでは有るが、ジェイス自身も負けてはいない。

「ちよつとどけどけどけど！ その奴ら、ホントに邪魔！」

ジェイスに思わぬ神からの助力、見ると路地裏の先で風体のよろしく無い男三人と、それと対面して石畳の上で身体を折り畳む様な姿勢で頭を地面に着けている黒髪の青年が路地を塞いでいた。

ジェイスはもう少しで少女の背に手が掛かるといったところで、少女は路石を蹴って大きく跳び上がり、その勢いのままに、路地の壁を蹴って、蹴って、そのまま屋根まで登った。

少女は成すすべの無いジェイスの方を見下ろしにこやか笑う。

「じゃーな、変なフードの兄さん。野良犬に噛まれたとも思ってた諦めな、そこでその兄ちゃんゴメンな！ アタシ忙しいんだ！ 強く生きてくれ！」



「つて、ええ!?マジで!」

少女は捨て台詞を吐いてすぐにジェイスの見える場所、つまり、見下ろしていた頭上から姿を消した。そして、足元の青年はそれを名残惜しそうに見送る。

「くそっ!」

ジェイスは悪態をつきながらも諦めた様子を見せず、自身の内のマナに意識を集中させる。

そして、知識のままに呪文を口走り手の先から浮き出る青白い文字で紋章を描いた。

「来い! Cloud Sprite, Drake Familiar  
雲のスピライト!、ドレイクの使い魔!」

ジェイスが声を出すと、ジェイスの描いた紋章から蝶の様な羽根の生えた、パタパタと飛ぶ手乗りサイズの小さな人型の生き物とジェイスと同じ位の全長の恐竜のプテラノドンめいた両翼を持った身体に、脚に鋭い鉤爪を持ち、頭は鋭い牙の羅列した獰猛なトカゲを想わせる生物が現れた。

「スプライト、ドレイク、屋根の上を走る小柄な人間を追え、可能ならば捕まえて来い」  
ジェイスが端的に指示を出すとスプライトとドレイクと呼ばれた生物は少女が登っていった屋根の方へと飛び上がり姿を消した。

ふう…と一息ついたジェイスは自身のすぐ周囲を見回し、男四人からの注目に気付いた。  
ジェイスは暫し、人差し指を目頭と鼻の間に置いて深呼吸をし、彼らを見て、一言発した。

「…それで？…こちらはどのような状況なんだ？」